

# 茂木のあゆみ



長崎名勝図絵より

1	茂木の由来	3
2	旧茂木町の歴史	3
3	旧茂木町の範囲	4
4	茂木の人口等の変遷	4
5	陸上交通	6
	(1) 明治中ごろまでの茂木街道	6
	(2) 旧県道	7
	(3) 堀切	7
	(4) 新県道	7
	(5) 飯香浦線	7
	(6) 山川河内線	8
	(7) 大田尾線	8
	(8) 弥生道路	8
	(9) 茂木～飯香浦	8
	(10) 茂木～大崎・千々	8
	(11) 人力車と客馬車	8
	(12) 乗合バス	9
	(13) バス路線の拡充（長崎バス）	9
6	海上交通	10
	(1) 浦見番所	10
	(2) 大正年間まで	10
	(3) 昭和期以降	10
	(4) 旧町内交通	10
7	昭和30年頃の茂木の交通	12
8	茂木港湾埋立てと整備	13
	(1) 栈橋の築造	13
	(2) 海岸の埋立て	13
9	問屋と宿屋	15
10	造り酒屋	17
11	西南の役と茂木	18
12	山川河内（太田尾町）の大水害	18
13	7・23長崎大水害	19
14	産業	20
	(1) 漁業	20
	(2) 農業	20
	(3) 商業	21
	(4) 枇杷	21

## 1 茂木の由来

古老の口伝によれば、昔の茂木村は、入江に漁師の家が数軒あるのみの名もない浦だった。神功皇后が三韓からの帰途、この浦に船をよせられ、岸（弁天山）にのぼって見られているとき、川上から青菜が漂って来たので青菜が浦と名づけられたという。もみ菜が浦ともいう。

また、村口に祀ってある所で、八人の武臣が狭い所に夜の被（夜具のこと）を共にしたので群着の浦と呼んだのが後に茂木浦となったともいう。

さらには、神功皇后が岸にあがって川沿いに来られた時、川上から若い菜が漂ってきたので、この川を若菜川、この浦を若菜が浦と名づけられたともいう。それから、ここで裳（衣の下ばかま）を着かえられたので「裳着」の地名が起り、後で読み易いように「茂木」となったとも伝えられている。

この浦から田上峠に至る途中に鎧初という所がある。皇后が凱旋の祝いに鎧を着けられた所で「よそれ」と呼ぶ。さらに道を進められて、陣の尾という所は、皇后がしばらく陣をなして休まれた所である。それから玉の浦（長崎）に入り、筑前の国に入ったという。

さらに古老は話を進めて、甌岩で神功皇后が甌で炊事をされたことから甌岩といい、その香りが下の浦に漂ったところから、下の海岸ぞいを飯香浦と呼ぶようになったという。

長崎名勝図絵によると、茂木の前にある海は、北に彼杵郡、南に薩州、東に天草、西に島原があり、四方に通じているので四岐と名づけられた。外国船も多くここへ漂って入ってくる。千巖洋とは、山からとった名である。茂木の浦は南風泊ともいい、千巖洋をのぞみ、山や海の景勝地で、四岐の海を航行する船が南風にあえばここに避難することからこの名がついた。

※ 神功皇后は、「古事記」「日本書紀」に伝わる人物で(3世紀頃)、広辞苑には「仲哀天皇の皇后。名は息長足媛。開化天皇第5世の孫、息長宿禰王の女。天皇とともに熊襲征服に向い、天皇香椎宮に崩御の後、新羅を攻略して凱旋し、誉田別皇子(応神天皇)を筑紫で出産、摂政70年にして崩。(記紀伝承による)」とある。新羅攻略は三韓征伐と言われ、このとき神功皇后はお腹に子(後の応神天皇)を宿したまま朝鮮半島まで出征し、100歳で死んだとされる。

また、同書に熊襲は、「記紀伝説に見える九州南部の地名、またそこに居住した種族。肥後の球磨と大隈の贈於か。」とある。

## 2 旧茂木町の歴史

茂木が歴史に登場するのは正暦5(994)年で、伊予から大村に入った大村直澄の領地として知行された。天正8(1580)年領主大村純忠は、長崎村とともに茂木村をイエズス会に寄進し、約8年間イエズス会の支配するところとなり、その間に神寺が焼かれることとなった。天正15(1587)年豊臣秀吉が茂木を教会から没収した。

慶長19(1614)年徳川幕府領となり、元和2(1616)年松倉豊後守重政が大和国五条藩から島原領主となった。寛永15(1638)年、島原の乱後高力摂津守忠房が遠州浜松から島原領主となった。

寛文8(1668)年天領となり長崎代官の統治下に庄屋を置いた。

明治5(1872)年長崎県高来郡第2区第7小区に編入された。



本郷片町の町役場

明治 7(1874)年深堀、高浜、野母、脇岬、樺島、川原、  
為石、布巻を含めて一大区となった。

明治 12(1879)年 7 月郡制施行にあたり西彼杵郡茂木  
村となり、旧庄屋跡に戸長役所を置いた。

明治 22(1889)年 4 月町村制実施にあたり、茂木村役  
場と改称し、役所を本郷片町（現在の東長崎商工会茂木  
支所）に移した。

大正 8(1919)年 10 月 1 日に町制施行により茂木町と  
なり、昭和 37 年 1 月 1 日に長崎市に編入された。



旧茂木町町旗

### 3 旧茂木町の範囲

昭和 37 年 1 月 1 日に長崎市に編入した時の旧茂木町の行政区域は、現在の太田尾町、飯香浦町、田手原町、早坂町、田上 1～4 丁目、北浦町、茂木町、宮摺町、大崎町、千々町の範囲である。

現在では、橋湾沿いに県道 34 号線が日見から三和まで通じているが、茂木村、茂木町の頃は、橋湾沿いに南北に細長く、陸路は道幅が狭く急峻な山道のみで、荷物の運搬には櫓かいの小舟を用いるしかなく、風波が起これば途絶する状況にあった。行政面でも思うように連絡が取れない場合や、急を要することが処置困難な場合も生じていた。このような地理的状況から、必需品等の購入など経済的に自然と地理的に近いところとの結びつきも強く、旧茂木村であった明治 31(1898)年 10 月 1 日に現在の潮見町、春日町を隣接する旧日見村に、旧茂木町であった昭和 22 年 4 月 1 日に現在の<sup>とうだお</sup>藤田尾町を旧為石村に、それぞれ分離している。

### 4 茂木の人口等の変遷

茂木の人口について、資料の算出基準が一貫していないが、時代背景が現れているのでそのまま掲載している。

#### ① 正徳 4(1714)年

584 軒（百姓 153 名子<sup>なご</sup>215 漁師 216）

3,512 人 馬 57 疋 牛 2 疋 御番所 1 ヶ所

※ 名子とは、一般農民より下位に置かれ、主家に隷属して賦役を提供した農民。

#### ② 寛延 3(1750)年

5,424 人（男 2,765 人 女 2,659 人）

内ころび切支丹（男 110 人 女 20 人 計 130 人）

渡海船 30～40 作船 36 漁船 37 威鉄砲 44 挺 酒屋 2 軒（各 8 石宛つくる）

※ ころび切支丹とは、江戸時代にキリシタンの信者が弾圧を受けて仏教に改宗した者。これは過去帳にも明確にされ、浄土宗の場合、元来浄土宗としたものからの仏徒と区別し、ただ浄土宗として死後まではっきりさせていた。

※ 威鉄砲とは、鳥獣などをおどして追い払うために撃つ空砲。

③ 明和7(1770)年

689 軒 (本百姓 153 名子 313 水呑 168 漁師 55)

5,859 人 (男 2,959 人 女 2,900 人)

威鉄砲 44 挺 酒屋 2 軒 浦見御番所 2ヶ所 門番 2 名

(この時は、本郷・飯香浦名・木場名・田上名・宮摺名・大崎名・千々名の7地区)

※ 水呑とは、田畑を所有しない貧しい小作または日雇いの農民。

④ 元治元(1864)年

687 軒 (本百姓 153 名子 311 漁師 223)

7,493 人 (男 3,823 人 女 3,670 人)

馬 254 疋 牛 35 疋

古賀浦	27 軒	248 人	北浦	44 軒	不明	田上	28 軒	131 人
太田尾	52 軒	545 人	本木場	23 軒	222 人	宮摺	37 軒	401 人
飯香浦	63 軒	669 人	田手原	41 軒	404 人			

※その他の記録なし

⑤ 慶応2(1866)年

687 軒 (百姓 153 名子 311 漁師 223)

7,695 人 (男 3,935 人 女 3,760 人)

⑥ 明治18(1885)年

本籍 1,758 戸 <sup>きりゅう</sup>寄留 50 戸 社 14 戸 寺 4 戸 計 1,826 戸

7,625 人 (男 3,879 人 女 3,746 人)

※ 寄留とは、住民登録制度ができる前の制度で、90 日以上、本籍地以外の一定の場所に居住する目的で住所または居所を有すること。

⑦ 大正年間の戸数

大正元年 1,888 戸

2年 1,877 戸

3年 1,878 戸 11,718 人

4年 1,916 戸

5年 1,921 戸

⑧ 国勢調査による人口

大正9年	9,977 人	昭和10年	10,384 人	昭和25年	13,391 人
大正14年	10,186 人	昭和15年	10,613 人	昭和30年	14,020 人
昭和5年	10,569 人	昭和22年	12,696 人	昭和35年	13,883 人

⑨ 昭和37年1月1日長崎市編入時の人口

2,661 世帯 14,272 人 (男 6,983 人 女 7,289 人)

⑩ 昭和 30 年度統計と現在の世帯数・人口の比較

昭和 30 年度部落別統計					平成 24 年 2 月末 (住民基本台帳)				
名名	世帯数	男	女	人口計	町名	世帯数	男	女	人口計
千々名	146	369	393	762	千々町	137	145	182	327
大崎名	104	318	365	683	大崎町	129	167	166	333
宮摺名	85	272	266	538	宮摺町	85	110	123	233
本郷	1,438	3,729	3,705	7,434	茂木町	1,688	1,759	2,135	3,894
飯香浦名	187	540	561	1,101	飯香浦町	234	334	366	700
太田尾名	140	444	433	877	太田尾町	152	216	243	459
田手原名	99	313	324	637	田手原町	456	451	523	974
木場名	40	141	112	253	早坂町	140	118	172	290
田上名	212	472	553	1,025	田上 1~4 丁目	1,661	1,610	1,947	3,557
北浦名※	—	—	—	—	北浦町	428	483	546	1,029
合計	2,451	6,598	6,712	13,310	合計	5,110	5,393	6,403	11,796

※ 昭和 30 年度部落別統計に北浦名のデータがないため、記載していない。

昭和 30 年と現在と見比べると、合併前の長崎市街地に近い、田上や田手原町などは住宅化して人口が増加しているが、その他の地域は、大きく減少している。

## 5 陸上交通

### (1) 明治中ごろまでの茂木街道

いつのころ造られたかは不明であるが、片町から裳着神社の手前で山手に向かい辻を通り、柳山橋を渡って転石、田上を経て長崎の小島の正覚寺の下（茂木口）に通じる旧道があった。この道に、明和 6(1769)年江波市左衛門が温石の石畳を敷き、安政 5(1858)年 6 月に長崎の魚商である、出来鍛冶屋町の竹内億介と東築町の蒲池喜兵衛が私費で、石橋（柳山橋）を架けて通行の便をはかった。その頃の荷物の運搬はサジ（指）といって番所に登録して許可を受けた運搬夫が、肩に担いだり、牛馬で運搬していた。



石畳の茂木街道（片町）

長崎名勝図絵によると「長崎に出入する要路は 6 つある。蛮人が来攻すれば、大村軍が来て守備する。

ひがしどまりぐち  
東泊口

長崎の南。更に南へ下れば深堀、野母浦。少し舟に乗って樺島に至り、あとは大洋海である。

茂木口

長崎の南。田上峠から東南に茂木浦口、天草に至る。ここから東西に渡って、肥後薩摩に入る。

いらばやしぐち  
穎林口

長崎の東。旧長崎城の古道。東南して臺原、大窪山の道を過ぎ、眉嶽の南に至り、東口を下りて飯香浦に至る。この浦は茂木に属する。

ひみとうげぐち  
火見嶺口

長崎の東。一瀬橋を渡り、峠口を過ぎて矢上驛。東して諫早荘。荘から東すれば佐嘉郡、筑後柳川、南は高来郡に至る。

まごめぐち  
馬籠口

長崎の北。ここを北に行けば長興路、浦上圪。更に北すれば時津の港で、大村に至る。その北の路は唐津に通ずる。

西山口 長崎の東北。路が三つに分岐して、右は矢上驛、左は浦上、中は伊木力から海路大村に達する。」

とある。茂木街道は、茂木の魚や野菜を長崎に運ぶ街道であるとともに長崎と天草、肥後、薩摩を結ぶ街道でもあった。

## (2) 旧県道

従来の茂木街道は勾配が急で、荷馬車や人力車の交通には不便だったため、明治 18(1885)年に茂木村海岸淵頭から若菜川に沿って片町・大川橋・転石・田上・高平町を経て長崎の油屋町に通じる旧県道が整備された。

その後、若菜川の氾濫で大川橋が被害を受けたために、大正 12(1923)年 5 月に架けかえられている。



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵

## (3) 堀切

茂木淵頭を起点として茂木・長崎間の鉄道敷設の計画が進められ、大正 10(1921)年 9 月 19 日に資本総額 50 万円で茂木鉄道株式会社が設立された。当初、淵頭を基点としていたが、当時北浦・茂木本郷間は車馬の往来が出来る道がなかったことから、北浦住民の鉄道誘致の結果、鉄道路線が変更され、大正 12(1923)年堀切の工事が始まった。同時に茂木港内と打越海岸の埋立てが行われ、大正 15(1926)年に堀切の工事が完成した。

当初計画されていた鉄道敷設は実現できなかったが、堀切の完成により茂木本郷・北浦間の交通路が確保されるとともに埋立地の整備という成果を残している。



現在の堀切

## (4) 新県道

明治 18(1885)年に県道が整備されていたが、道幅が狭く、曲折が多く、勾配が急であったりしたため、昭和 9 年に長崎から茂木港内の中央の波止まで新しい県道が整備された。その後、これを宮摺まで延長している。茂木小学校付近の桜の木は、その頃植えられたものである。

昭和 29 年に 3 ヶ年継続事業により舗装が完成された。

この県道は、昭和 45 年 4 月に国道に指定された。(国道 324 号)

## (5) 飯香浦線

飯香浦・太田尾は極めて険阻な坂道・幅員 1 m にも満たないといった交通路で、荷物などの運搬には利用されない状態で、舟で茂木港に運び、茂木から県道を通って長崎へ運んでいた。また、豪雨があると交通が途絶する状況であった。このため、大正元(1912)年 2 月より旧茂木村と長崎市の話し合いに着手し、第 1 期工事として大正 6(1917)年 2 月から長崎・六本松間の工事が始まり、大正 12(1923)年 3 月に完成した。第 2 期工事は昭和 8 年 2 月に始まり昭和 15 年 3 月日吉小学校前まで完成した。この間、毎年農閑期に道路造りの夫役の労苦があったと伝

えられている。その後、飯香浦、片峰、太田尾へ延長されている。

(6) 山川河内線

山川河内は、茂木町の最東端に位置し、住民は農産物を長崎市に出荷して生計を維持する者が多かったが、長崎へ通じる道は急峻で狭く、人肩や牛背にて運ぶしかなかった。このため、住民の金銭の寄附、夫役も併せて、昭和8年4月道路工事に着手し、昭和13年3月に697間(1,267m)が完成している。

(7) 太田尾線

日吉小中学校の前から太田尾間の道路は昭和13年に着工されたが、戦時中は中断し、昭和24年に完成している。

(8) 弥生道路

唐八景は長崎に近く、4月28日の準堤観音の祭の時は、ハタ揚げも行われていた。大正の頃までは、この日に芝居やノゾキなども来て大変な賑わいであったという。古くから長崎市民の憩いの場であった。

長崎市は、昭和6年に市南東に位置する景勝地・唐八景を開発して観光公園とする計画を具体化し、旧茂木町から土地の寄付と労力の提供を受け、工費1万3千円で昭和7年11月23日に起工し、田上から頂上まで約2,320mの自動車道路を完成させ、昭和8年3月31日に開通式を行った。

昭和8年3月26日東伏見宮妃殿下御巡視の際、弥生道路と命名された。

(9) 茂木～飯香浦

茂木～片峰間の道路は、飯香浦住民が、昭和26年11月に町補助7万円で第一期工事に着手し、翌27年町事業として、県・町支出金と地元民の労力負担で着工し、昭和35年までに幅5.5m延長1,259mが竣工した。昭和36年度からは県単独事業として整備されることとなった。

昭和39年から41年にかけて陸上自衛隊によって現在の道路が開設された。

(10) 茂木～大崎・千々

茂木と大崎・千々間は、5.6トンの発動機船で人だけでなく日用品や農産物、農業資材などを運んでいた。昭和36年から5年間かけて宮摺・大崎・千々間に林道を整備し、昭和46年には県道となった。



(11) 人力車と客馬車

明治時代から交通機関として発達してきた人力車や客馬車は、茂木・長崎間を盛んに往来していた。人力車は昭和9年頃まで、客馬車は昭和18年頃まで走っていた。その頃の客馬車は、6人乗りで茂木・長崎間を定期便が1日3回通い、料金は15銭で、貸切は1円から1円50銭であった。



## (12) 乗合バス

内燃機関を動力とする4輪自動車が日本に上陸したのは、明治33(1900)年、時の皇太子(大正天皇)の御成婚に際し、サンフランシスコの在留邦人から献上されたものが最初となる。その後、明治36(1903)年1月に広島横川～可部間で日本最初の乗合バスが運行された。長崎市内では、その10ヵ月後の明治36(1903)年11月に長崎～茂木間に初めて運行されたが、定期客馬車との競合に敗れて廃業した。

昭和の初めには小型自動車により、定期乗合バスが運行を開始した。当時は、1日4回の定期運行であった。

鹿児島島の豪商上野喜左衛門は、雲仙小浜自動車を買収し、雲仙を拠点にしてバス事業をスタートさせた後、昭和11年4月28日、長崎～茂木間で競合していた崎陽自動車商会と金子自動車商会を買収し、資本金3万円で新会社「長崎茂木乗合自動車株式会社」を設立した。

設立当時使用した車両は、買収した2つの会社が所有していたフォード幌型6人乗り計6台。従業員20人。本社(鍛冶屋町)の敷地は20余坪、1階は車庫と待合所、2階は事務所とした。路線は長崎市鍛冶屋町～茂木本郷8.1キロ。運賃は大人25銭、小人20銭であった。当時、乗合バスを営んでいたのは、西彼杵半島や長崎半島などにおいてこのほか数社あった。



創業当時、鍛冶屋町～茂木間を走ったフォード製バス(右の車両)  
長崎自動車株式会社 提供

昭和11年8月15日、社名を「長崎自動車株式会社」と改称した。

## (13) バス路線の拡充(長崎バス)

昭和24年11月28日	田上～飯香浦(早坂経由)
昭和26年7月28日	茂木～宮摺
昭和27年7月27日	田上～唐八景
昭和28年2月10日	茂木～北浦
昭和39年11月2日	宮摺～大崎
昭和43年11月11日	大崎～千々
昭和49年4月8日	北浦～片峰
昭和54年6月23日	日吉～太田尾
昭和60年10月23日	片峰～宮の下

## 6 海上交通

江戸時代から鉄道が敷設されるまで、茂木は島原・天草・肥後・薩摩と長崎を結ぶ交通の要所で、若菜川河口一帯は、問屋・旅館が軒を並べていた。

肥後・薩摩からは「トマ船（苫船）」という、菅<sup>すげ</sup>や茅<sup>かや</sup>などで弧<sup>こも</sup>のように苫を編み屋根として雨露を防いだ船で往来していた。

茂木枇杷発達史に、「明治10年代には、「1ヶ年出入船数蒸気船25艘、日本形船大小凡そ1,470艘余、1ヶ年出入貨物米凡15,000石、清酒720石、食塩200石、茶6,000斤、樟脳8,000斤、椎茸5,000斤、其他魚類、数勝に算ふへからず代価50,000円に近し」（「庶務課史誌掛事務簿」明治18年）」とあり、当時の茂木港の繁栄の様子がわかる。

（※ 1石：100升：約180リットル 1斤：約600グラム）

### (1) 浦見番所

寛永の頃、田上に村目附をおき、寛文5(1665)年から茂木海岸に浦見番所が置かれた。番所役は治安行政を掌っていたと思われるが、後問屋を兼ね、商業を営むなどのこともしていたようである。明治12(1879)年4月25日の浦役人名簿から、この頃までは置かれていたことがわかっている。

### (2) 大正年間まで

明治の末期から大正年間にかけて、三山汽船会社が茂木港から

- 富岡・本渡を経て三角行きの航路
- 口之津・加津佐を経て島原港行き航路
- 網場・タエ・ウキ・千々石を経て小浜行き航路

の三航路を運航していたが、いつの頃からか、九州汽船会社（後の九州商船株式会社）が運航するようになった。

明治41(1908)年に島原鉄道株式会社が設立され、大正2(1913)年に島原まで鉄道が開通すると茂木港から島原方面への旅客貨物の利用が著しく減少した。

### (3) 昭和期以降

昭和に入って港湾の整備は進んだが、茂木港からは天草・三角航路だけとなった。昭和32年9月からは三角行きも廃止され、富岡行きのみとなった。その後、昭和54年にフェリーの運航が始まった。平成23年9月にフェリーが廃止され、同年10月から安田産業汽船が高速船を富岡に運航している。

### (4) 旧町内交通

昭和初期には5.6トンの発動機船1隻が運航していたが、昭和29年に「茂木交通有限会社」が設立され、5.6トンの発動機船3隻が、茂木～大崎～千々（乗降客の有る場合、宮摺にも寄港する。）に1日3回運航していた。

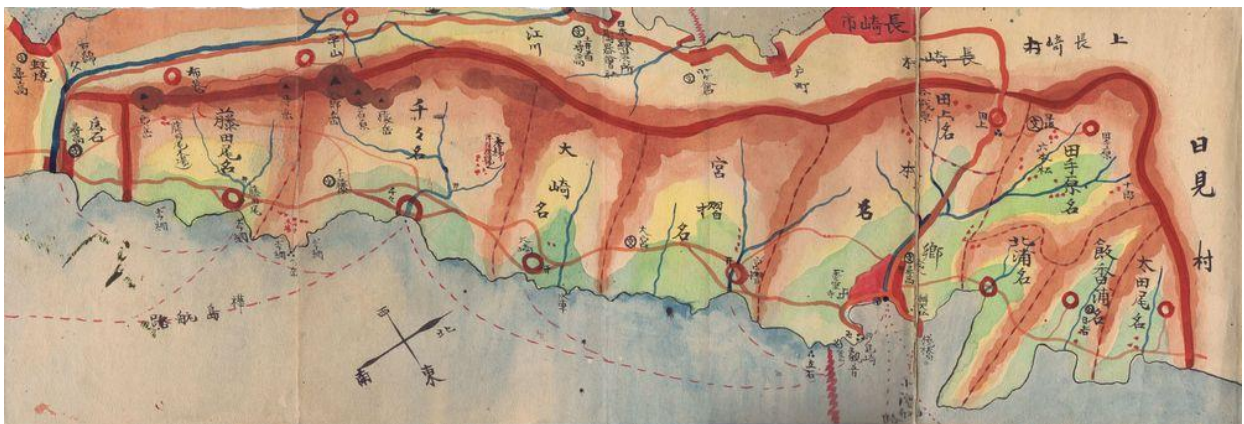
茂木港からの時間・運賃は、宮摺20



分 20 円、大崎 30 分 40 円、千々 40 分 50 円であった。

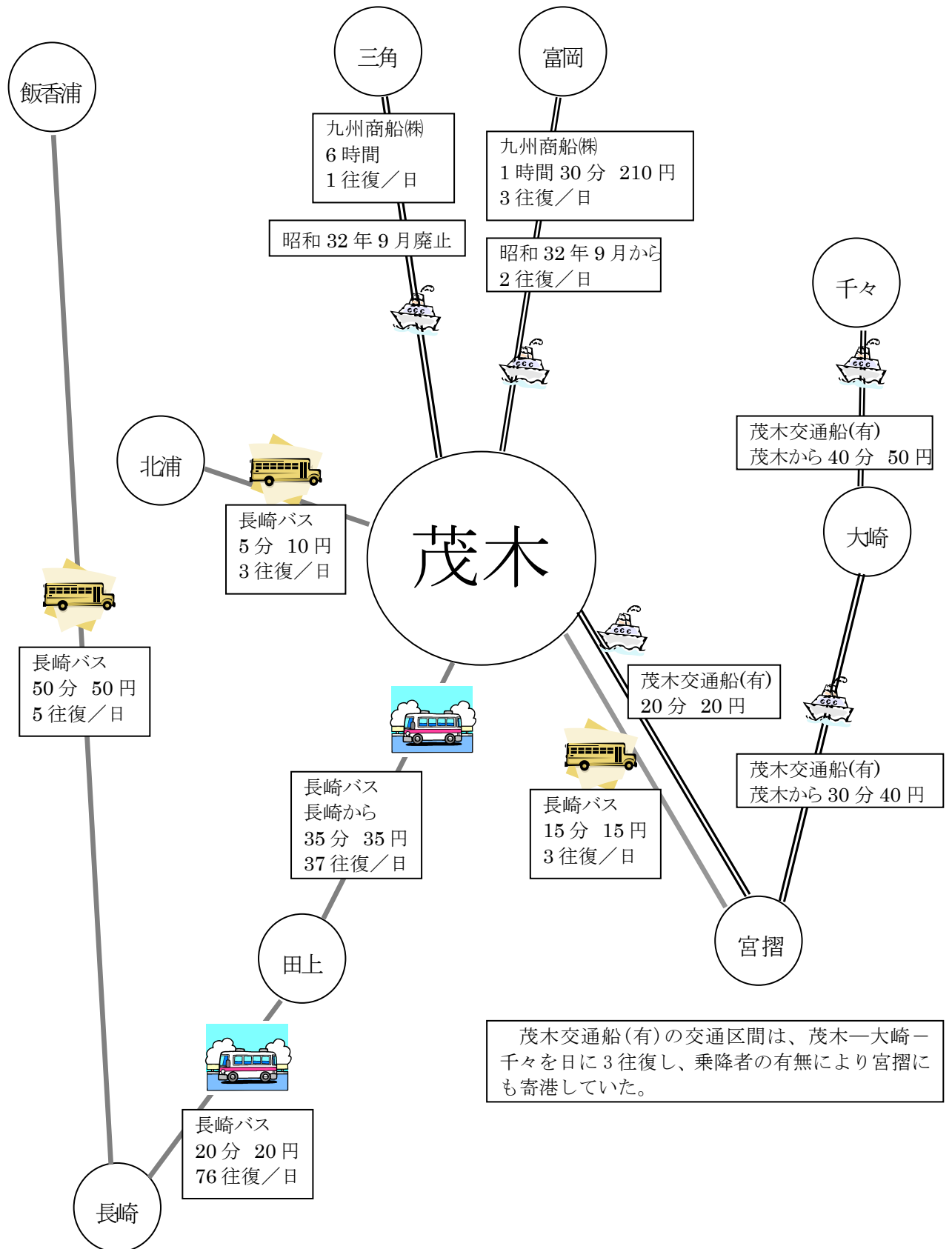
下の地図は大正 7 年 9 月編纂 西彼杵郡茂木村郷土誌の地図で、当時茂木から宮摺、大崎、千々への航路のほか、千々から、藤田尾、為石、樺島への航路があったことがわかる。この千々から南への航路は、ろ漕ぎの舟が通っていたということである。

当時、茂木・長崎間は旧県道が開通していたが、村内の陸路は狭く急峻な道だったため、海上交通が中心であった。



## 7 昭和 30 年頃の茂木の交通

昭和 33 年発行の茂木町郷土史による当時の交通である。



## 8 茂木港湾埋立てと整備

### (1) 栈橋の築造

築造時期は不明であるが若菜川下流の淵頭海岸に栈橋が造られていたが、水深が浅く乗降は端艇によらなければならなかったため、明治 34(1901)年 2 月から栈橋代用突堤（長さ 45 間：約 82m、幅 2 間：約 3.6m、高さ平均 2 間 5 合：約 4.5m）の建造に着手し、同年 8 月に竣工した。

その突堤から長さ 6 間(約 11m)、高さ 3 尺(約 0.9m)の箱舟 3 隻をつないで浮栈橋をつくった。

この栈橋は、昭和 8 年 8 月に新栈橋が出来るまで使用され、昭和 30 年 2 月の河口の砂防堤築造の際に取り壊された。

### (2) 海岸の埋立て

大正 12(1923)年から茂木鉄道株式会社による堀切工事と同時に、茂木港入口の防波堤の築造が進められた。茂木港入口の防波堤の築造は、茂木鉄道株式会社提供の堀切掘削の土砂による弁天橋から玉台寺付近に至る海岸埋立地約 1,700 坪を財源とし、昭和 2 年 3 月に竣工した。

（長さ 110 間：約 200m、工費 175,000 円）

港内の水深が浅く船の出入・停泊に支障があるため、海底を浚渫し、その土砂で新田以南の埋立て工事を昭和 3 年 6 月から昭和 7 年 3 月にかけて行った。（工費 227,500 円）

昭和 8 年 1 月、港内中央部に船だまりを附設した新栈橋の築造工事に着工し、同年 8 月に竣工した。（工費 34,800 円）その後も、港湾整備が行われ、昭和 54 年 4 月には弁天山の東側の埋立地に茂木港フェリー埠頭が出来た。

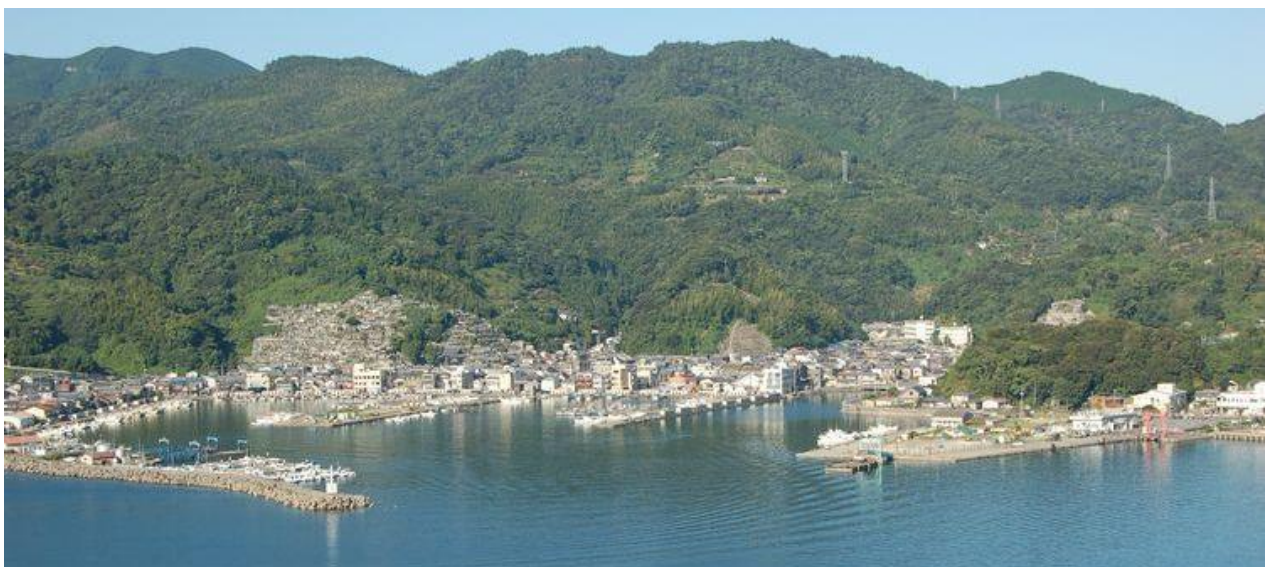


点線が埋立て前の海岸線



茂木港修築計画平面図

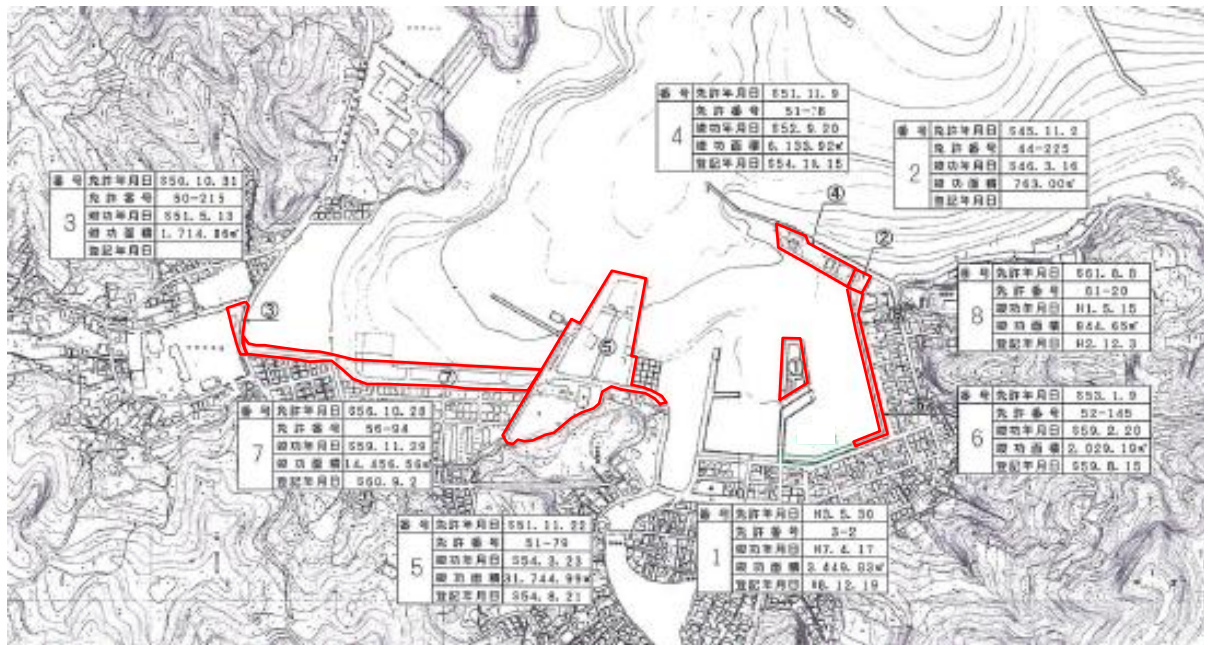
この図面は、大正 12(1923)年からの埋立てにかかるもので、埋立て前の海岸が現在の県道 34 号線と橋口商店街の間の通り付近で、玉台寺の山門の前が海岸だったこともわかる。中央部に埋立て後の区画が線引きされている。また、若菜橋が大正 11(1922)年の架け替え時に、橋口側の位置が変わっていることがわかる。架け替え前の橋口側は、橋の手前で左に曲がりさらに右折していた。



現在の茂木港

昭和 45 年以降の埋立ては、次の通りである。

番号	竣工	位置	用途	埋立面積
2	昭和 46 年	茂木町本郷 2189 番地 8 及び 2189 番地 6 地先 2189 番地 6 に隣接する道路地先	護岸敷 野積場敷	763 m <sup>2</sup>
3	昭和 51 年	北浦町字松崎 2018 番地 40 に隣接する護岸より 2018 番地 24 に至る地先	道路用地 運動場用地	1,714.46 m <sup>2</sup>
4	昭和 52 年	茂木町本郷字唐人松 2198 番地 11 地先	埠頭用地 水産施設用地	6,133.92 m <sup>2</sup>
5	昭和 54 年	茂木町本郷字片町 54 番地から 75 番地 2 に至る地先	埠頭用地 船揚場敷	31,744.99 m <sup>2</sup>
6	昭和 59 年	茂木町本郷字寿 2173 番地 1 に隣接する道路から 2148 番地 31 に隣接する道路に至る地先	埠頭用地	2,260.88 m <sup>2</sup>
7	昭和 59 年	茂木町 75 番地 8 地先、北浦町 1983 番地 97 に隣接す る堤防から 2018 番地 24 に隣接する道路に至る地先	埠頭用地	14,717.02 m <sup>2</sup>
8	平成元年	茂木町 2189 番地 7 から 2189 番地 13 に至る地先	港湾施設用地	855.80 m <sup>2</sup>
1	平成 7 年	茂木町 1590 番地 66 に隣接突堤式物揚場地先	港湾施設用地	3,561.46 m <sup>2</sup>



昭和 45 年以降の埋立図

## 9 問屋と宿屋

江戸時代から明治初年までは、島原・天草・肥後・薩摩への要路として、重要な港であった関係上、旅客や貨物が頻繁に運ばれ、若菜川河口一帯は問屋が軒を並べ盛況を極めていた。当時の問屋で伝えられているものは、島原屋・天草屋・八代屋・志岐屋・肥後屋・肥前屋・福岡屋・筑後屋・薩摩屋・港屋・新島原屋・油屋で、宿屋と問屋を兼ねているところが多かった。

その後、汽車、汽船が発達する明治の中頃までは交通の要所として、島原屋・天草屋・八代屋・志岐屋・肥後屋・肥前屋・福岡屋・筑後屋・薩摩屋の 9 軒が旅館として人力車を門口に置いて旅行者の便をはかっていた。

汽車、汽船が発達するにつれて、茂木航路の利用者は減少していったが、観光客や夏の海水浴客などの増加があり、また、旅館も料理屋を兼ねるようになり、旧茂木町が長崎市に編入される前の昭和 30 年頃、旅館は、次の 7 軒があった。

① ビーチホテル

旧庄屋の後に、明治 39(1906)年道永エイが「茂木ホテル」を開業した。当時、ロシア艦隊などが長崎に入港したときに、軍楽隊を先頭に茂木街道を下りここに遊んだという話もある。昭和 2 年 4 月から砂田ツイが「ビーチホテル」として経営を引き継いでいる。その後、大長崎建設の寮を経て、昭和 56 年に解体された。

② 天草屋

古くからあったが、昭和 22 年 9 月小川虎重に経営者が変わり、現在はなくなっている。(廃業時期不明)

③ 潮見荘

古くは観月といった料理屋であった。御堂正一が大正 10(1921)年 5 月から潮見荘として発足した。後に、「勝若」と変わり、現在はなくなっている。(廃業時期不明)

④ 茂木荘

開業時期不明。株式組織として経営されていたが、昭和 24 年田端市蔵に経営者が変わり、昭和 31 年建物を新築し料理旅館となる。昭和 37 年別館を新築し、店名「海月」と変更、昭和 57 年長崎大水害で従前地は休業。平成 2 年に建て替え店名を「いけす料理割烹旅館海月別亭」と変更して営業している。

⑤ かね万旅館

昭和 7 年 8 月休息所として開業したが、昭和 26 年 8 月池山ツネが「かね万旅館」として経営を始めた。現在、「いけす料理かね万」として営業している。

⑥ 望洋荘

昭和 10 年頃からはじめられたが、昭和 30 年 6 月に経営者が変わり、さらに、二見茶屋が買収し昭和 39 年鉄筋コンクリート 3 階建てのホテル「新二見」を開業し、昭和 57 年に廃業した。

⑦ 二見荘

昭和 9 年 4 月川脇武雄が開業。「二見茶屋」として昭和 40 年代半ばまでは料理旅館であった。現在は「料亭二見」として営業している。

その後、「真砂荘」が営業を開始し、何代か経営者が代わって、現在「いけす割烹旅館恵美」として営業している。

また、昭和 47 年 10 月、津田就子が「割烹旅館こがね」を開業、昭和 57 年から旅館は廃止し、



海岸沿いに並ぶ料亭。左端の海岸に立岩が見える。立岩の右の入江に“いけす料亭こがね”があるが山陰になっている。左から“料亭二見”、“いけす料理かね万”、“いけす割烹旅館恵美”、“いけす料理割烹旅館海月別亭”の5軒の料亭が海沿いに並んでいる。右側は茂木港。



「いけす料亭こがね」として営業している。

以上のとおり、現在、茂木港の南の海沿いに5軒の料亭が営業している。各料亭は海岸沿いにあることから、座敷から海を隔てた雲仙、天草方面の景観は見事なものである。

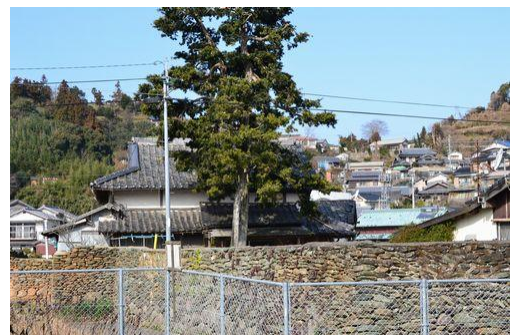
## 10 造り酒屋

江戸時代、茂木には2軒の造り酒屋があった。このことは、長崎代官所の記録としてあり、「長崎おもしろ草第3巻犯科帳の世界」に「安政4(1857)年、茂木村の百姓平三郎とその倅宗蔵親子が、市内馬町の茂三郎から酒造かせぎの鑑札を譲り受けたから、村内で酒をつくりたいと村役人に願い出た。一方、これまで村内で酒を造っていた吉郎太と栄五郎の二人は、これ以上酒造人をふやしてもらいたくないと、同じように村役人に願い出た。それで代官が裁くことになった。

村役人たちは、現在以上に酒の量がふえては、とくに若いものにとって風儀上もおもしろくないから、酒造はもちろん、酒の小売りも酒造人以外のものにはさせたくないと考えていた。それに茂木村では酒造は2軒に限るという古いとりきめができており、天保13(1842)年のお触れには、百姓が耕作の本業を捨てて町人まがいの商いに走ることを堅くいましめてあった。代官は、そんなことを勘案して、平三郎親子に酒造願いをとりさげるように勧めた。しかし、平三郎はどうしても代官の勧めに応ぜず、請証文に判をつかなかった。ほかの村民への見せしめもあり、代官は平三郎を手鎖郷宿預けの処分にした。そのうち平三郎は病気となり、自宅での療養を許され、その間村預けの身分になった。」とある。

また、安政6(1859)年に、茂木村小前<sup>こまえ</sup>総代として、百姓の円蔵・忠平、漁師の乙蔵・八之助・吉太郎などが、村の人口も増加し酒の需要が増え、酒が不足気味なため、小前一同相談して酒造家を1軒増やすことを認めて欲しいと二人に掛け合ったが、代官から増やせといわれたら何とかしようが、お互いの話ではだめだと応じてくれないとあって、代官所にもう1軒酒造家を作ることを承知するよう二人を説得してもらいたいという願書を提出した。代官は関係者の言い分を聞いた。その中で、村役人の言い分は、「茂木村は村高660石、家数680、人数7,800人余。東西7里余、幅1、2里。本郷と枝郷に分かれ、枝郷は田上・木場・宮摺・飯香浦・大崎・千々の6つの名に分かれている。そのうち本郷は家数210軒、人数2,100人余、長崎から1里半で、茂木村の中心部落である。前面に天草・島原をひかえ、その他の国々との船の往来が多い。積み荷の大半はここでおろして牛馬で長崎へ送られるから、農業のほか運送の日雇いに出るものが多く自然の賑わいとなっている。漁師のほとんどが本郷に集まり獲物は“通い”と称して、その日のうちに長崎市中へ出荷される。…」とあり、当時の茂木の様子がうかがえる。さて、願書については、1軒ふやしたほうが良いかどうかについて村役人の間でも可否の判断がつかないと述べている。代官が吟味の結果を奉行に報告した。報告をうけた奉行は、代官が互いの訴えを吟味しただけで、結果について黒白をつけずにそのまま奉行に取り次いだことを不都合だと断じ、双方の言い分に意見をつけた上で、酒造家の数は古いしきたりに従い2軒のままとする判断を下した。

右の写真は、若菜橋の近くにある造り酒屋港屋の跡である。石積の塀に囲まれた庭には1本のマキの巨木がある。これは、閑院宮熾仁親王<sup>※</sup>がお泊りになられた時に、お手植えされたと伝えられている。



※ 閑院宮熾仁親王と伝えられているが、<sup>ありすがわたるひとしんのう</sup>有栖川熾仁親王か<sup>かんいんのみやことひとしんのう</sup>閑院宮載仁親王の誤りではないかと思われる。

## 11 西南の役と茂木

明治 10(1877)年に起こった西南の役で熊本城が包囲されたとき、長崎にも緊張がおり、官軍の一個中隊が派遣されて警備の任についた。中隊長藤原九郎左衛門は 130 人の兵卒を率い、田手原名の森田丈市宅に中隊本部を置き、主力を甑岩の北方、日見村との境、獅子の<sup>つ</sup>都に置いた。ここは、天草、鹿児島・熊本の一部、島原半島、日見、矢上の国道筋・喜々津・大草の一端・茂木を見下ろす形勝の地で、ここに約 3 間 (5.4m) に 15 間 (27m) 深さ 5 尺 (1.5m) くらいの散兵壕を掘り、小隊の兵士が昼夜警備にあたった。高地に電柱大の杉の柱を建て、敵兵発見の場合は信号旗を揚げて本部に伝えることとしていた。また、中隊本部の直前の道路に 6 人、1 町 (109 m) 余下手の道路に 6 人、<sup>じゅうろう</sup>重郎の辻に 10 人を配置した。

警備の期間は 40 日余で官軍兵士の銃は元込め式 (後装式) の単発で、脚絆に<sup>わらじ</sup>草鞋履であったので、付近の人々はよく草鞋を作っては日々兵士に贈ったとのことである。

## 12 山川河内 (太田尾町) の大水害

万延元(1860)年、<sup>さんぜんごうち</sup>山川河内地区で鉄砲水による山崩れが発生した。「長崎おもしろ草第 3 巻 犯科帳の世界」には、「茂木村飯香浦名に、三方はつきたつた山に囲まれ、南は海をうけた抜底という部落があった。家数 30 軒、総人数 166 人で、全部農業渡世をしていた。

万延元(1860)年 4 月 8 日、朝からの豪雨が終日やまなかった。山あいからの激しい流水が田畑に流れこまぬように部落民は夜通しその作業に当たった。9 日の朝、ものすごい震動とともに縦 150 間(約 270m)、横 25 間(約 45m)にわたっての山崩れがあり、土砂や立ち木などが一挙に崩れ落ちた。家 7 軒小屋 7 軒が潰され、即死 24 人行衛不明 9 人、牛馬も合わせて 13 頭死んだ。1 段 3 畝余(約 1,300 m<sup>2</sup>)の田にも土石がかぶさり用にたたなくなった。

知らせによって代官手代は現場に駆けつけ、実情を調べるとともに、死体の発掘・死者の葬儀・けが人の手当て・罹災民の救済などにつとめた。

思いがけない大きい災害で百姓たちはぼう然とした。しかし、一日も早く復旧につとめなければならぬ。家財や農具など少しは掘り出したが、ほとんどはうつつぶされて用にはたたなかった。肝心の牛馬はほとんど死んでしまった。なによりも雨露をしのぐ小屋をつくらねばならぬ。田畑の土石をとり除かねば以後の作物がとれない。それに物価急騰の折りで、それに要する資金のやりくりはなんともならない。みんなで相談の末、銀 6 貫 500 目余りの拝借銀を代官に願い出ることにした。結局、この額は銀 4 貫目に減らされ 10 ヶ年賦として、長崎会所に預けてある非常備銀から出すことを勘定所に認められた。」とある。

このような甚大な被害の後、残された住民は村を去ることなく、助け合いながら集落を守り、この大災害の教訓を忘れず、防災に心がけるとともに、被災者の供養のため現在も毎月 14 日に輪番で<sup>ねんぶつこう</sup>念仏講まんじゅうを集落全体に配っている。

なお、発生日については、茂木町教育委員会が昭和 33 年発行した「茂木町郷土史」では、4 月 8 日とあり、玉台寺の過去帳は同 9 日と記されている。

### 13 7・23長崎大水害

昭和57年7月長崎では、10日～20日までの11日間で581.5ミリ(内20日は243ミリ)の雨量があった。

23日は、19～20時に111.5ミリ、20～21時に98ミリ、21～22時に102ミリ、22～23時に61ミリ、23～24時に32.5ミリの時間雨量があり、1日で448ミリの雨量を記録した。

このため、23日の19時ごろから災害通報が入りはじめ、その後、市内各所で山崩れ等が発生した。

茂木地区でも、茂木町の片町で2名、大崎町で1名が亡くなった。また、多くの家屋の浸水や橋梁の流出等の被害があった。

河川別浸水家屋、流出橋梁数

河川名	浸水家屋(戸)	流出橋梁(基)
若菜川	570	2
千々川	29	3
太田尾川	8	1
飯香浦川	—	1
北浦川	143	—
大崎川	38	—
宮摺川	29	1



黒橋付近



茂木小学校グラウンド付近



土砂に埋まった新田の県道



茂木小学校前付近の旧県道

## 14 産業

茂木村は、江戸時代長崎と共に天領であり、長崎が唯一の貿易港として栄えた時代、島原、天草、肥後、薩摩と長崎を結ぶ交通の要所として栄え、それは、鉄道の整備により陸上交通に取って代わられるまで続いた。

茂木枇杷発達史によると、明治 10 年代の総戸数は、1,858 戸のうち、主な職業は農業 1,084 戸、漁業 350 戸、商業 300 戸とあり、総戸数と比較して商業戸数が多いことは、江戸時代から陸上交通が整備されるまで交通の要衝として栄えていたことが現われている。

### (1) 漁業

茂木の漁家は古くから専業で、江戸時代は「舟人<sup>ふなと</sup>」と呼ばれ、千々石灘での沿岸漁業が主体で、大正 12(1923)年からの埋立て工事前の港は、右の古写真のような砂浜であった。

大正 7(1918)年編纂の西彼杵郡茂木村郷土誌によると、当時、本郷において約半数の漁家があり、千々岩灘・天草灘の近海漁業で、獲れた魚類はその日のうちに長崎に送る小規模なもので、3、4 月に朝鮮近海に出漁するものも少数はあるが、秋冬にかけて杵島<sup>いわし</sup>での鯛網は本村漁民の唯一の大規模な漁業であった。

大正 5 年頃の漁業戸数は、415 戸で専業 2507 人(415 戸)、兼業 183 人(30 戸)であった。

現在の茂木の漁業は 3~5 トンクラスの小型漁船による底引網とはえ縄(1本の横に伸びる長い幹縄に適当な間隔で、多数の釣り糸をつけた漁具を用いた漁法。)が主である。なお、底引網漁船は、漁船の横が黄色に塗装されている。中には、赤に塗装されている船がある。これは、エンジンが大きい底引網漁船である。

底引網の漁場は橘湾で、夏は車えびなどのえび類やワタリガニ、冬はひらめをはじめ多くの魚種がある。

はえ縄の漁場は野母崎沖から五島灘で、あまだい、連子鯛、イトヨリ、冬場のトラフグが主なものとなっている。

早朝から、茂木の漁港の近くや築町などで新鮮な魚の直売が行われている。また、海沿いに新鮮な魚介類を味わえる料亭も営業している。

右の写真は、茂木港の正月の様子で、撮影時期ははっきりしないが、背景から昭和 44 年~昭和 54 年の間に写されたものであることがわかる。



年代未詳 長崎大学附属図書館所蔵



底引網漁船



正月の茂木港

### (2) 農業

橘湾沿いに南北に細長い茂木は、比較的温暖であるが、地勢は急傾斜地が多く、耕地は大部分が谷間や山腹にあり、水田が少ない。農産物は、茂木びわで有名な枇杷をはじめ、みかん、

いちご、梨、桃などの果物のほか、筍、花き類などがある。

明治10年代の農業について茂木枇杷発達史には、「当時の農業は戸数1,084戸で水田93.5町、畑485.4町の耕地を耕作し、1戸当り5.3反という零細な規模で、しかも、水田の少ないことは、一般に少ないとされる西彼杵郡下にあつて、ことさら目立っていた。農産物は、ばれいしょ、さといもなどのそさい類、<sup>はぜ</sup>樫実、筍、薪などの林産物の生産が多く、その大部分が長崎市、熊本県などの村外に移出されていたことは注目すべきである。

これは、大正7(1918)年編集された茂木村郷土誌において『本村は山地多くして平地少なく、殊に水田に乏しきを以て、農民は水田作農業よりも畑作農業に発達したるが如く、畑作農業の中にも、其生産物の市場として近く長崎市に接するを以て穀作を作ることよりも野菜を作ることに進歩せり、故に麦の如き他地方に対し多少の輸出を見るも、米の如きは其産額僅かに1,500石に過ぎずして、村内住民3ヶ月間の需要を充すに過ぎず、残る8、9ヶ月間の需用米は多く肥後、島原、諫早方面より輸入す。これに反し筍の如き、馬鈴薯の如き、里芋の如き、<sup>すいか</sup>青菜の如き、<sup>とうがん</sup>西瓜、<sup>きゅうり</sup>冬瓜、<sup>はたまごぼう</sup>胡瓜の如き、将又牛蒡、人参の如き畑作野菜の生産額実に驚くべきものあり』(茂木村尋常高等小学校編『茂木村郷土誌』大正7年)…とくにばれいしょの多いのが目立っている。当時県下におけるばれいしょは…長崎市の居留外人、入港外国船舶の食糧として、また外国輸出のため重要であつて、長崎市近在での生産は盛んであつた。…また一方では山林の多いことによって、交通に恵まれない宮摺、千々などでは薪の生産によって、生計を補う農家も多かつた。」とあり、当時の茂木の状況がわかる。

### (3) 商業

茂木村は、江戸時代から陸上交通が整備されるまで長崎と島原・天草・熊本・鹿児島を結ぶ交通の要衝として栄えていたため、総戸数と比較した商業戸数は多かつたが、長崎市に近く、生産物の販売のため毎日のように長崎市に往来しており、服をはじめ他日用品は長崎市で買い求めることが多く、米や酒を除く村内商業は極めて不活発だった。

### (4) 枇杷

茂木枇杷発達史によると、枇杷は、わが国にも古くからあつたが、果実が小粒で丸く種子が大きかつたため、実用性に乏しかつた。これに対し、中国から持ち込まれた枇杷は、大粒のもので、唐枇杷と呼ばれていた。

天保・弘化の頃、呉越の船が盛んに往来していた。この頃、長崎の唐通事の家<sup>に</sup>女中奉公していた三浦シヲ(本名:ワシ)が唐通事から貰つた唐枇杷の種を自家(北浦名木場)の畑に播いたのが茂木枇杷の始まりで、この木が茂木枇杷の初代である。



現在の枇杷原木(4代目)

北浦名木場は、当時10戸余りの小部落で、この地方では当時本名と通称の呼び名を持っており、通称は縁起の良い呼称が使われ、「シヲ」は特に好んで用いられていた。

嘉永3年(1850)年頃、隣家にいたかご職人の山口権之助がその枝を貰い、自家の在来種の成木に高接したのが第2代目である。

安政5(1858)年、北浦名の三浦萬次郎が山口権之助から枝を貰い接木したのが、第3代目である。

翌安政6(1859)年、三浦八十八が三浦萬次郎から枝を貰い接木したのが、第4代目である。

山口権之助はかご職人で、刃物の取り扱いがうまく、三浦萬次郎や三浦八十八に接木の方法を教えたとのことである。

初めて「茂木」の果実を長崎に出荷したのは、維新前後で、三浦八十八が接木したものの果実だといわれ、それまでの在来種に比べて外観、食味ともに優れていたのが有利に取引されたことで北浦、茂木本郷などで作付けする者が増えていった。

なお、以上について次のような説もある。シヲは病弱であったため驚のように強くなるように、後で「ワシ」と改名した。また、シヲの奉公先が代官所という説もある。ちなみに、「茂木町郷土史」茂木町教育委員会発行には、長崎代官屋敷に女中奉公していた三浦シヲが枇杷の種子を貰うけ、甥の山口権之助に送り、木場の屋敷の一隅にまいて茂木枇杷の原木をつくったとある。この説について、茂木枇杷発達史には、「昭和9年建立された茂木枇杷記念碑々文に始めてでてくる



年代未詳 茂木枇杷の原木(2代目)

もので、それ以前の資料は唐通詞が多く系累者からのききとりでも唐通詞の説が強い。」とある。

また、大正7(1918)年編纂の西彼杵郡茂木村郷土誌には、木場名山口慶三郎なる人の叔母に当たる人長崎にある支那人の家庭に出入りし、上海より渡来の枇杷の実を得て山口慶三郎の庭前に実生したものが茂木枇杷の母樹とである。この母樹から最初に接穂を得たのが三浦八十八と記している。



袋をかけた枇杷畑

現在、枇杷の生産農家では、結実後に袋掛を行うため春に枇杷畑を遠くから見るとまるで花がついたように見える。この枇杷の袋掛は、最初は害虫駆除の目的で、明治39(1906)年に茂木村本郷の前田瑞穂が、県外視察の際シュロの毛でナシを包むのにヒントを得て始めた。袋掛をしてみると害虫防除だけでなく、雨による裂果防止、創傷防止など品質を高める効果があった。その後、大正時代に入ると品評会が行われるようになり、袋掛をした枇杷の評価が高かったことから広く行われるようになった。



新聞を重ね裁断する道具

当初袋は、半紙に柿渋を塗ったものを使用していた。その後、新聞紙を使うようになった。写真は、昭和40年代頃まで使用されていた新聞の裁断に使われていた道具である。

また、茂木は従来から筍が重要な物産としてあるように、竹林が多く竹製品、特にカゴ類の

製造が早くから行われていたため、枇杷の出荷容器として昭和38年にダンボールに切り替えられるまで竹かごが使用された。

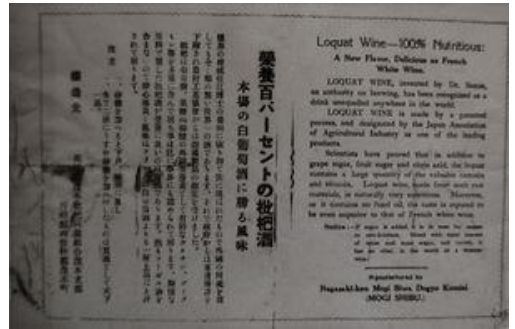
枇杷の加工について、枇杷の生産が増加し生果として生産過剰のおそれがあったことから、明治40(1907)年、大正10(1921)年、昭和7年と3度缶詰などの加工が試みられたが、生果の販路拡張や生産費の関係から工場の新設、製造には至らなかった。昭和10年代になると生産量が増加し、へた割れや傷果などのくず枇杷対策のため昭和14年から枇杷酒の生産を始めたが、昭和17年に砂糖が入手困難となったことから廃止された。

枇杷の品種は、幕末から明治初期にかけて中国から大果品種の種子が持ち込まれ、各地で実生による繁殖が行われ多くの品種が生まれたが、現在でも茂木種が全国の枇杷の約半分を占めている。また、枇杷の品種改良により大果品種が多く出されているが、中でも、茂木種の流れをくみ、茂木種よりさらに大果で食味が優れた新品種(ビワ長崎15号)が生まれ、平成22年2月に「なつたより」と命名、品種登録され栽培が進められている。

枇杷は、「びわ」とも「ひわ」とも呼ばれているが、明治期に地方の方言として円実種はヒワといい、長実種はビワと呼んでいる。



枇杷酒容器



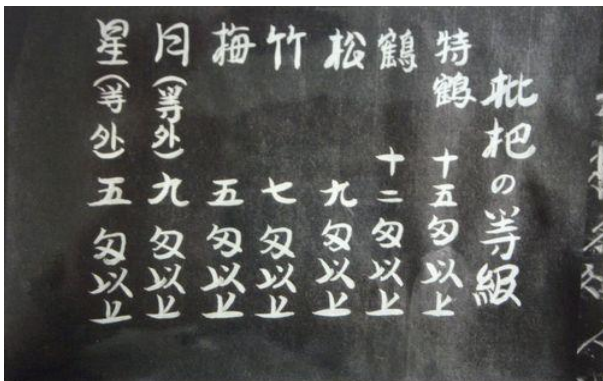
枇杷酒のしおり



年代未詳



年代未詳 枇杷の選果



昭和30年ごろの等級  
(1匁: 3.75g)



昭和38年にダンボールに切り替わるまでは竹のかごで出荷していた。



年代未詳



年代未詳  
千々、大崎からは、船で茂木まで運んで陸送していた。



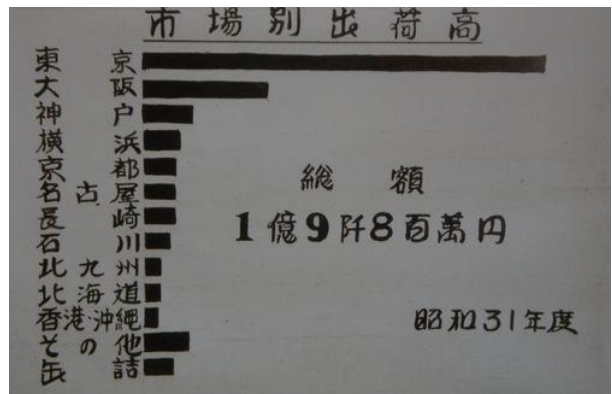
昭和 20 年代 枇杷市場



年代未詳 枇杷の輸送



昭和 20 年代 枇杷の積み込み



枇杷の市場別出荷高



年代未詳 店頭



長崎民友新聞社は、昭和 34 年 1 月に長崎日日新聞と合併し長崎新聞となった。